

牧口常三郎の世界と創価教育学 —今、創価教育学は何を訴えるか—

熊 谷 一 乗

本日は、雨の中、わざわざお出かけ頂きまして、厚くお礼申し上げたいと思います。

実は、三十数年前に、ふとしたことで、『創価教育学体系』に触れまして、牧口先生と
のご縁が出来ました。以来、その縁は切れることなく続きまして、本日、生誕130周年の
佳節にお話をするということになりました。いま、感慨無量の思いで、皆さんの前に立っ
ております。

私は、初めて牧口先生の著作に触れ、先生の心の世界を知りまして、大変、感銘を受け
ました。以来、「牧口先生の世界」から離れることなく、今日まで先生のことについて、
色々な機会に話したり、書いたり、ということをやってまいりました。

創価教育学も、そして創価大学も、その源は牧口先生の誕生に遡ります。130年前、牧
口先生の誕生と共に、創価教育学、創価大学の種が蒔かれ、やがてそれが芽をふいて、今
日のこの立派な創価大学のキャンパスになったわけです。

この創価教育学という言葉には、全ての人の幸せを願う、牧口先生の心が込められてい
る、そんなふうに考えております。創価教育学をわたしたちの幸福のためにプレゼントさ
れた牧口先生の心が、本日、私を皆さんの前に、導いて下さったのではないか、などと思
ったりします。

さて、1871年、明治4年の年の6月6日、当時の地名で申しますと、柏崎県刈羽郡荒浜
村、現在の新潟県柏崎市荒浜に、牧口先生はお生まれになりました。130年前の今日のこ
とでございます。

牧口先生の誕生によりまして、130年前には、全く存在しなかった創価教育という思想、
創価教育学説という新しい教育の理論が生み出されました。牧口先生の心から生まれた、
創価教育、創価教育学の考え方は、いまや日本の国を超えて、世界全体に広がり、地球上
の至る所で、大変、意味の深い文化と教育の運動を実現させております。

創価教育学の根本は、価値の創造という考え方を基本にして、教育を通して、世界に平和、人々に幸福をもたらそうという思想である、と私は考えています。それは、できるだけ多くの人に、価値を創造できる力を育てて、最大多数の人の最大幸福を、この地上に創り出すことを目指す思想である、といていいと思っております。つまり、人類に生きる喜びと希望を与える思想である、といえるのです。

私たちの生きている時代には、多くの難しい問題が山積みされております。創価教育学の思想は、これらの問題を解決するための智慧を私たちに与えてくれます。この創価教育学は今日の社会と人間にとって、意義の深いものであると思います。

牧口先生が創価教育学を確立され、創価教育の理念を説かれたことは、現在と未来の人間と社会に対する、実に、偉大な価値の創造であった、と、いいいいのではないかと、思います。

牧口先生の生誕130周年に当たりまして、まず、このように創価教育学の意義を確認しておきたい、と思います。

創価教育学には、先生の最初の著作、『人生地理学』をはじめ、数多くの著作のエッセンスが収められておりまして、牧口先生の生涯にわたる思索がまとめられております。それは、牧口先生の心の世界の結晶である、といてよいと思います。

関係のなかで生きる人

本日は、牧口先生の心の世界を訪ねまして、先生が創価教育学をとおして、教育の危機や荒廃が叫ばれる時代に生きる私たちに、どんなことを訴えておられるのだろうか、このことを探してみたい、そんな趣旨で話をさせて頂こうと思います。

生誕130周年ということでもありますので、まず、牧口先生の心の世界が、どういうふうに創られたのか。それは、どのような世界であったのか、そのご生涯を通してみたいと思います。その後で創価教育の思想がどのようなものであるのか、ということを皆さんと一緒に考えてみたい、と思います。

牧口先生が、『人生地理学』を著されたのは、弱冠32歳。1903（明治36）年のことです。

『人生地理学』の冒頭と巻末には、こういう言葉が引用されています。

「地を離れて人無く、人を離れて事無し。人事を論ぜんと欲せば、まず地理を審らかにせざるべからず」（『人生地理学』 第三文明社刊）

これは、実は、幕末の思想家として、私たち日本人にはよく知られている吉田松陰の言

葉であります。

牧口先生は、この「地を離れて人なし」という言葉を以って、『人生地理学』を書き始められ、そして最後を締め括っておられます。このことに、牧口先生の思想が良く現れているように思います。

牧口先生は、同じく『人生地理学』の初めの方で、
「人間は地上に生まれ、地上に棲息し、地に育せられ、地に啓発せられ、地上に活動し、地を利用し、ついに地に死骸を遺して逝く」(同上)

こういう一文を書いておられます。

この場合、“地”というのは、地域社会とか郷土、そういったものを含み、地球環境、あるいは地球上の世界と理解すればいいのではないか、と思います。

牧口先生は、人間をただ個人としてみるのではなくて、地理的環境と一体、不可分のものとみる。地理的な環境を離れては人間の生活は成り立たない、人間という存在はない、という考え方を基本に置いて、思索の輪を広げておられるわけです。

牧口先生の描き出される世界は、地理的環境、さらに広く地球環境を拠り所にして生きている人間の姿、地球環境と関係することによってのみ成り立つ人間の生活を、生き生きと映し出しているものである、とこんなふうにいえます。

人間の生活と、この地球環境との深いつながり、深い結びつきに注目された牧口先生は、人が育ち、生活していく上で、どんなに多くの人々、環境と関係を取り結ばなければならないか、いかに周囲の事物から恩恵を受けているかということを絶えず強調されております。

先生は51歳の時、東京・港区の白金小学校の校長に就任されます。この白金小学校で先生は、保護者、すなわち父母ですね、父母との連絡をできるだけ密にするために『しろかね』という通信パンフレットを発行されました。その『しろかね』に先生は、次ぎのように書いておられます。これは父母、そして出来れば子どもたちにも読んでもらいたい、という思いを込めて書かれたものであります。

「人間が一人前になるには、少なくとも二十年も父母のお世話にならねばなりませんまい。思えば、人間ほど他人のお世話にならねばならぬように出来ているものはありません。いくら強い人でも、一人前の力だけでは知れたものです。防ぐにも、攻めるにも、逃げるにも、追うにも、人間ほど弱い動物はいません。一人ではこんなにか弱い生物が雨風、寒さなどに抵抗して、猛獣や毒虫等を征服し、自然の力を利用し、万物の霊長となり、今の文明を作り出したのは何故でしょうか。団体を組んで、その仲間に入り、心を一つにし、力を合わせ、共同生活をなすことを知ったからであります。魚は水から出せば、たちまちに

死にます。人間も社会を離れては生活は出来ません」

人と人との関係、連帯、つながり、共同生活、人と社会との結びつきをその生涯を通じて、大変、重視しておられます。人は自分だけで生きるものではない。さまざまな人、いろいろなものとの関係の中でのみ生きる存在である。以上の一文は、そういう牧口先生のお思想をわかりやすく説明しています。

実は先きほどの一文には牧口先生のお思想の原点と申しますか、創価教育の根本をなす思想がよくあらわれているように思います。

牧口先生は、いま、申しましたように、『人生地理学』を書かれた若い時から、一人の人間が生きていくということを世界全体、山河を抱く地球、さらに太陽・月などの天体を含む宇宙と結びつけ、関係させておられます。牧口先生のお発想は、宇宙の構成要素としての地球の全体、人間がつくり出す社会全体の動きに鋭敏に開かれていた、ということがいえるのです。『人生地理学』から『創価教育学体系』、さらに法華經への信仰、入信後の活動まで、牧口先生の世界を貫く思想の特徴がここに見出されるように思います。

“開明的精神”の形成

それでは、何故、このように人間を世界全体と関係させるという、開かれた思想が形成されたのでしょうか。そのことを考えてみたいと思います。

まず、生い立ちとの関係が大きいと思います。牧口先生がこの世に生を受けられた地、新潟県柏崎市荒浜は日本海に面しております。私も、誕生の地、荒浜を二回ほど訪ねましたけれども、海岸に立ちますと、佐渡ヶ島が向こうに見えまして、日本海の荒波が、心を打ちました。その光景が今、目に浮かんでまいります。先生は、大きな広がりにつながりを感じさせる海に面した環境に生を受け、育たれます。

さらに、歴史的には、260年間続いた幕藩体制が崩壊して、日本が、欧米の文明を積極的に吸収し、近代化に向けてスタートを切った時、いわば近代日本の夜明けの時にお生まれになり、そして、人間形成を開始されたということ、このことも先生のお思想を見るうえで、重要なポイントだと思います。

今、申し上げたことは、牧口先生の生い立ちの背景ということになります。少し、細かく見てまいりますと、先生は幼い時に、両親と離別されられまして、日本海に面した荒浜で廻船業を営んでいた、親戚の養子として育てられております。

小学校時代には、家業の手伝いをしなければならないために、学校に行けない、という

ことがあったそうです。学校に行けない時は、仕事の手伝いが終わった後、夜、友人の家を訪ねて、学校での授業の内容を教えてもらったというようなエピソードが残っています。勉強好きな牧口先生は、友人の有難さを身にしみて感じられたことであろうと、想像いたします。

14歳の頃、単身で、新潟から北海道の小樽に渡られます。そこで昼間は、小樽警察署の雑務の手伝いをされます。当時は、給仕といったのですが、その給仕をしながら、夜、学校に通うという状態で勉強をされています。幼少年期にいろいろと苦労しながら、勉学に励んでこられた経験から、人間が生きるということが、どんなに多くの人々の援助を必要とするかを実感されたことでしょう。

すでに少年時代に、人間が生きていくには、周囲の人や物、つまり環境との関係がとても大切であるということを経験を通して理解されていた。そのことが根底にあって、地理学という学問に関心を持ち、これを特別に研究し、20代の終わりから著述にとりかかり、30代の早い時期に『人生地理学』を刊行されることになったといえるように思います。

今、申し上げたような成長の過程を通して、外界にオープンで物事に積極的に取り組む開拓者の精神、つまり“開明の精神”と同時に、相互に助け合う相互依存、共生を重視する精神、さらに生活の現実と経験を尊重する精神、こういう精神から成り立つ牧口先生の世界が作られたのではないか、と思います。

科学、合理性の重視

牧口先生の世界の一端がお分かり頂けたところで、次に、創価教育という思想が、どのように創られていったのか、ということについて述べてみたいと思います。

まず、牧口先生が教員養成の学校に入学された、ということを挙げなければなりません。明治22(1889)年、先生は18歳。その18歳の春、先程、申し上げた、警察署の署長であった森長保という人の推薦があり、北海道尋常師範学校に入学されます。この師範学校入学が牧口先生にとって、教育者への道を進む直接のきっかけとなります。実は、教員養成を目的とした当時の師範学校では授業料を納める必要がありませんでした。しかも、官費で、つまり国の費用で生活ができ、しかも、給費、お小遣いまでが政府から支給されました。こういう師範学校の制度は、牧口先生のように身寄りのない若者にとっては、実に有難いことであったわけです。牧口先生は、少年時代から読書好きで、大変な勉強家であったということですが、師範学校の生徒に与えられた恩典、特典を最大限に利用して勉強に専念

された、と伝えられております。

この師範学校で、欧米の学問、近代の知識を貪欲に、一生懸命に吸収されました。この精力的な勉学を通して、近代という時代を特徴づけております、科学と合理性を重んずる思想を学びとられています。創価教育学を理解する場合には、この点が重要です。牧口先生の『創価教育体系』の前半は、科学と合理性ということをお大変、重視されております。“科学的教育学”の樹立を提唱され、創価教育学は科学的教育学として構想されたものです。

師範学校を卒業されて、牧口先生は、教育者としての道を歩まれることになります。卒業と同時に、母校の付属小学校の訓導です。これは、どんなに、先生が師範学校の生徒として、優秀な成績を修められたか、ということをお物語っています。

教育者の道を歩まれた牧口先生は、創造的な生き方をされました。文部省の示した方針に従って、その日その日を無事に務め終えていく、という、いわゆる“サラリーマン教師”的な教員ではなかったのです。

教員の資格を得るには、師範学校の時代に、当時 教生と言ったのですが、教育実習を行わなければならない。牧口先生の場合は、教生として付属小学校で教鞭をとられます。牧口先生は教生をされたさいにも、付属小学校のベテランの教員が驚き、すっかり共鳴した作文の指導法を考案されています。

どういう指導法かと申しますと、これまで作文の指導といいますと、テーマを子供たちに与えて、作文を書かせて提出させ、それに教員が赤ペンを入れて、文章を直していく、というやり方でした。

しかし、こういうやり方では、一向に多くの子どもの作文力が育たない。何とか、全ての子どもが効率よく作文がうまくなる指導の方法はないものか。このことを一生懸命に工夫を重ねて産み出されたのが、後に“文型応用主義”と呼ばれる作文指導の方法です。

これは、別に難しいことではなく、文章の基本的な型、基本パターン、これをまず子どもたちに徹底的に理解、習得させる。その上で、その基本を応用して文章を書かせる、ということをお皆にやらせる。文章の基本の型という意味での“文型”を応用して作文を書く。このやり方が、子どもたちの作文能力の向上に、大いに、効果を発揮したわけです。

教生時代の文型応用主義の開発は、牧口先生が創意工夫の教育実践家、創造的な教師であったことをよく物語っています。

教育改革へ画期的な提言

牧口先生は大正元年、いまから、90年近く前になりますが、“郷土科”を中心として学校のカリキュラムを作ると、いう提案をされます。これは『教授の統合中心としての郷土科研究』（以下、『郷土科研究』）という書物にまとめられています。

“郷土科”という教科を新たに設けて、それを中心に国語や算数、理科といった教科を学ぶという、当時としては、ユニークな提案をされている。これは残念ながら、実現はしませんでした。牧口先生の創造的な生き方を物語るよい例の一つです。

『郷土科研究』が刊行された翌年、牧口先生は、小学校の校長に就任されます。校長時代の先生は、保護者と学校の間係をとても重視されます。学校には、保護者を敬遠する傾向があるのですが、牧口先生は、結局、子どもたちの成長に責任を負わなくてはならないのは親であると主張されて、親に学校の教育に積極的に参加してもらわなくてはならない、そのためには、学校は、保護者と連携を密にしなければいけないと訴えられています。

そういう考え方で、従来のような、いわゆる“授業参観”の日に保護者がやって来る、という形だけの保護者と学校との関係を変え、もっと積極的に、保護者が学校の運営に参加できるような仕組みを作る必要があることを提唱されました。これは、今日でも、大きな意味を持つ提案です。

牧口先生は、校長という、大変、忙しい職務の中で『創価教育学体系』を書かれるわけですが、この「体系」の中で自分の経験に基いて、画期的な教育改革を提言しておられます。ご自分の教員生活の経験から、まず教育の機会をできるだけ均等にするために、という趣旨から、複線型といわれる当時の学校制度を抜本的に改革することを提案されます。今日の六・三・三・四制に近いもので、それよりももっと教育の機会を全ての人に均等に与える、というねらいの学校制度を提案しておられるのです。

他にいろいろ提案されていますが、もう一つ、牧口先生の考え方を理解するうえで大切と思われる、提案を紹介しておきたいと思います。それは視学、英語ではインスペクターと言いますが、この視学という制度を廃止せよ、という提案です。視学というのは、学校を監視する、教員の活動を監視、監督するという役割を担った教育行政官のことです。牧口先生の時代、この視学が学校の運営と教員の勤務を厳しく見張っている、当然、教員は自由に伸び伸びと教育活動を行なうことはできません。教員はいつも視学を気にしながら、びくびく萎縮して教育活動を行なわなければならない。これではいけない、と牧口先生は考えられ、視学制度の廃止を提案されたわけ。視学は、教員の人事権をもっています。現職の校長である牧口先生が、人事権を握っている視学を批判し、視学制度をなく

せ、と提案することは、実に、勇気の要ることであったと思います。

近代日本の教育の歴史を振り返って見て、小学校の校長職にあった人物が、その時代の教育制度の根幹に関わるような教育行政の改革を提案した、という事例はまず、ないでしょう。牧口先生は明治以降の教育の歴史の中で特筆されてよい、改革志向の強い創造的な教育者でありました。ただ創造的であるというだけではなく、勇気のある教育者だったといわなければなりません。

子どもたちの幸せのために何が出来るか

つぎに申し上げたいことは、牧口先生は、教育者として子どもの幸福を願って献身的な努力をされたということです。

北海道から上京して来られて、最初の小学校長を務められたのが東京の下町、台東区の東盛尋常小学校です。この校区には、貧しい家庭が多く、文房具を持って来られない子どもが少なくなかった。何とかして、子供たちに文房具を持たせてやりたい。どうしたらよいか、牧口先生は、文房具屋と交渉して大量に一括購入し、それを市価よりも安くして買わせるという措置をとられました。

また、三笠尋常小学校の校長時代には、子どものために、味噌汁つきのお弁当を用意されました。それは、自分のポケットマネーの一部を割かれてのことだといわれています。当時は、学校給食などと言う制度はありませんでしたから、牧口先生は、身銭をきって、子どもたちのために実践をしなければならなかったということです。

実は、こうした“子どもの幸せのために”という願いから生まれたのが、『創価教育学体系』であります。この『創価教育学体系』の第一巻の冒頭を読みますと、受験地獄の苦しみに喘（あえ）いでいる子どもたち、そして、学校を卒業しても経済恐慌のなかで就職ができない若者たち、こういう未来の担い手たちを救い、幸せにするために何が出来るか、何をしなければならないかを真剣に考え苦しまれた跡がうかがえます。『創価教育学体系』の冒頭には、「入学難、試験地獄、就職難等で一千万の児童や生徒が修羅の巷に喘いで居る現代の悩みを、次代に持越させたくないと思うと、心は狂せんばかりで、…」

と、述べられています。

実は、牧口先生の“子どもの幸せのために”という考え方は、すでに『人生地理学』の中にも現れております。『人生地理学』を開いてみますと、“ヒューマニズム”という言葉が出てまいります。人道を大事にし、国と国との関係においても、この人道的な関係が

重要であると、いわれているのです。

『人生地理学』が書かれた、明治の30年代というのは、国家主義が盛り上がってくる時代であります。日本は、欧米列強に追いつき、追い越すことをめざして、“富国強兵”のスローガンのもとに、経済の発展に力を入れると同時に、軍隊の強化をはかった時代です。

そういう時代に、国と国との関係は軍事的な競争ではなく、人道的関係で結ばれなくてはならない、つまり、平和が大事だという考え方をもっておられた。『人生地理学』のなかの“ヒューマニティ”というカタカナの文字はとても印象的です。

このように、若い時代からもっておられた、ヒューマンイズムの心が、牧口先生を教師にし、子どものために尽くすという実践、子どもの幸福のために、自分の時間を割いて一生懸命に尽くす、という行動を産み出したのだと思います。

価値の創造によって幸福を

つぎに、お話ししなければならないのは、牧口先生は、人間が生きるということ、人生に対してほんとうに真面目で、誠実で、真摯な取り組みをなさったということです。

実は、そのことから、“価値の創造による幸福”という考えが生まれてきたのです。「人は何のために生きるのか。」これは人生の根本問題です。根本問題ですけれども、私たちは、ふだん、そんなことはあまり深刻に考えません。そんなことを考えることがたまにあって、それは一瞬、頭の中をよぎるという程度で終わってしまいます。

ところが、人生に対して、真面目で、真剣で、誠実だった牧口先生は、人は何のために生きるかという根本問題を、とことん探求していかれるわけです。その人生の意味を問い詰めていく過程で、牧口先生は、新カント派の哲学から非常に貴重なヒントを得ています。どういうヒントかと言いますと、価値の創造です。この価値の創造から創価教育学という言葉が、つくられてくることになります。牧口先生は 価値の創造という考え方を幸福と結びつけられ、人生の幸福は価値の創造によって得られる、という思想を確立されます。もちろん、この考え方の根底には、人はこの世に生まれてきた以上は幸せにならなければならない、という信念があります。しかし、現実には、あまりにも不幸が多い。この現実をそのまま認めてしまうわけにはいかない。牧口先生のヒューマンイズムからいいますと、この世に生まれてきた人は全て幸せになってもらいたい、幸せにならなければならないということなのです。そのためにどうしたらよいか。すべての人が互いにそれぞれの立場で価値を創造する、ということになるわけです。

いま、価値という言葉を使いました。価値については、さまざまな説明がなされます。理論的には難しい内容ですけれども、ここでは端的に、私たちの人生、生活にとって大切なもの、これが価値である、としておくことにします。

水であれ、お米であれ、みな、人間の生活（生命の働き）との関係で、価値です。同時に、形には見えない平和とか人権というものの、大切な価値です。私たちが生きるうえで、人権が保証されなかったら、どうなるか。こんなふうに考えてみると人権というものが大事な価値である、ということがよくわかります。もし、戦争で私たちの生活が目茶目茶になった場合を考えますと、平和がどれ程、大切な価値であるか、ということもわかります。

難しい価値論の世界には入り込まないで、端的に、私たちの生活の経験に照らしてみても、価値とは人生にとって、生活にとって大切なものである、と理解しておきたいと思います。牧口先生は、そういう人生にとって大切なものを創造する、それが価値の創造であるとされています。価値の創造がなければ、幸せになれない。幸せになるためには価値が必要である。価値を創造しなければならない、というのが、牧口先生の主張なのです。

価値を創造しなければ人生には幸福は得られない、という思想を、牧口先生は、教育の世界に展開されます。人生は何のためにあるのか。何のために生きるのか、という問題を真剣に探求するなかで、“幸福のための価値の創造”という考え方を確立された。その考えを発展させて、教育は何のためにあるのか、を探求されます。その答えは、価値創造の力を育てて、人々を幸福な生活をいとなむことができるようにするためなのだ、ということになります。こういう考え方が創価教育学の根本をなしています。

教育の根底に“慈悲”の精神を据える

実は、牧口先生の世界を理解するうえでいま一つ、重要なことがあります。それは、牧口先生が白金小学校の校長時代に、仏教、とりわけ「法華經」の信仰を持つようになられたということです。私たちは、明治以来、欧米の近代文明をせっせと取り入れて近代化をはかってきました。この近代化は、日本に大変な物質的繁栄、富と便利さをもたらしてくれました。

しかし、こういう富や便利さが得られた半面、20世紀という世紀を振り返ってみればすぐわかりますように、経済恐慌があり、企業倒産があり、失業者がたくさん出てくる、そして戦争があった。最近では精神的ストレスが増大しております。これらは、近代化の負の産物といっているいいでしょう。

大正の終わりから昭和の初めにかけて、日本は経済恐慌に襲われ、失業者が増える、学校の教員の給料も払えない、という町や村が出てくる、といった状態に陥ります。そういう状態の中で、この近代が産み出す問題をどう解決したらいいのか、近代という時代の限界をどう乗り越えたらいいのか、こういう問題が日本の社会全体にとって重大なテーマになってきます。こういう時代の状況のなかで、牧口先生は、入信し、「法華経」の世界に入ってゆかれます。

具体的に申しますと、日蓮大聖人の「立正安国論」に触れて、世直しが必要だ、世直しをするには心を変えなければならない、心を変えるにはどうしたらいいのか、変えるための拠り所、根本になるものが必要である。それは、仏法、日蓮大聖人の説かれた「法華経」である、ということを自覚されるわけであります。

実は、「法華経」の信仰の世界に入られたことにともなって、牧口先生の「価値論」に変化が生じます。牧口先生の「価値論」の特徴は、入信前は「利・善・美」といわれておりますが、個人の生活にとっての利益を基本にする考え方であったように思います。しかし、入信してからは、「価値論」では、むしろ“善”、特に、大きな善、“大善”ということを強調されるようになります。

“大善”とは何か、「仏法」にしたがって利他の実践を行い、最大多数の最大幸福を実現すること、といていいと思います。牧口先生は、信仰の世界に入られましたから、最大の価値創造によって最大の幸福を実現しなければならない、と説かれています。それでは、最大の価値を創造するにはどうしたらいいか。これは「仏法」に拠り所をおかなくてはならない、と考えられたのです。

当然、教育についての考え方も、「仏法」に拠り所をおくということが基本になってまいります。牧口先生は、“大善”の考え方のもとに、教育を実践するさいの根本精神として、慈悲ということを、強調されるようになります。

牧口先生は、創価教育学の根本は「法華経」の精神であり、慈悲である、と述べて、このように断言できるようになったことは、自分にとって無上の光栄である、と述べておられます。

創価教育学の究極の拠り所は、「仏法」になってくるわけですが、入信以前は、近代の思想であったと思います。科学と合理性を重んずる精神です。それが、入信にともなって「仏法」に転換するわけです。入信というのは、牧口先生個人にとって、もちろん、大きな出来事だし、創価教育学にとっても重要な意味をもっていたわけです。

牧口先生が創価教育学の拠り所を「仏法」に求められたこと、そして「仏法」にもとづいて創価教育学の新たな展開をはかろうとされたこと、これは、今日の教育問題、子ども

の問題、さらには社会のさまざまな問題に取り組もうとする私たちにとって重要な意味をもっていると思います。私たちの時代は、科学技術が高度に発達し、経済的に豊かになりましたし、便利になりました。物質的にみれば、恵まれた状態にあるとっていいと思います。

しかし、ひるがえって私たちの生活を細かく見てまいますと、さまざまな点で問題が多い。子供の問題については、後でふれたいと思いますけれど、不登校の問題、いじめの問題、そして今日では豊かになったといっても失業率は5%にのぼる、という状態です。近代化を遂げたから、私たちが幸せになった、とは到底いいえないわけです。

問題に満ちている今日の時代にとって、「仏法」を教育学の根底に据えるという牧口先生の考え方は大きな意味を持っています。牧口先生の創価教育学は、出発の時点では近代の精神に拠り所をおいた近代の教育学であったとみることができます。ところが、「仏法」に拠り所をおくことによって、近代という時代とその限界を超える教育学になった、とっていいと思います。つまり、創価教育学は、日本とか、近代とか、特定の所とか、特定の時代を超えて、何時でも、何処でも通じる普遍的な教育学になった、ということで、今日、創価教育学が意義を持つのは、そういうところにあるのではないか、と思っております。

信仰の世界に入られましてから、先生は、人間の生活を、まず、自然と向き合った生活、自分自身と向き合った生活、社会と向き合った生活に分けたうえ、これらの他に宇宙と向き合った生活があることを指摘されています。この指摘は、宇宙時代といわれる今日、大切な意義を持っています。

宇宙開発がすすみ人類が宇宙旅行するようになったからというわけではありませんけれども、これだけ人類が文明を高度に発展させて参りますと、人間、如何に生きるか、ということ、地球全体、さらに宇宙レベルで考えることが重要になってきていると思います。この点に関連して牧口先生は、宇宙と向き合った生活、これを私たちは自覚しなければいけない、と言っておられます。実はそこから、地球上の、世俗の世界を越えた宗教の世界が開かれてくるわけです。

牧口先生は、「法華経」の信仰に入られたことによって、宇宙という存在と自分の存在、広大無辺といわれる宇宙の世界と微小ではかない一箇の人間とが因果の法則で深く結ばれていることを自覚されています。そして、物理的にみれば、自分という存在は、宇宙の中の、小さな存在に過ぎないけれども、実は、その自分の心の中に宇宙が宿るのではないか。晩年の牧口先生は、宇宙と自分とが一つになる、そういう心の世界をつくり出していかれます。それは、広くて深い仏法の世界です。

晩年の牧口先生は、宇宙と自分とが一つに結ばれる、という「仏法」の世界を心に確立して、地上の権力を恐れない純粋な信仰活動を展開されることになります。

創価教育学は、現代に何を問いかけるか

以上で、牧口先生の世界について、私が、理解しているところをお話したことになります。

ここで、一体、創価教育学が今の時代に、そして、この時代を生きている私たちに、どんなことを訴えてくるのか、そんなことを考えてみたいと思います。

つまり、牧口先生が、もしあの世から蘇って来られて、今の日本の社会を見られた時に、どんなことを私たちに訴えかけられるだろうか。そんなことを考えてみたいと思います。

第一に創価教育学では教育の目的を子どもに幸福な生活を保障することに置くわけですが、いま、子どもたちは幸せか、という問題についてです。児童虐待、不登校、子どもの発達をめぐる問題が教育関係者だけでなく、社会全体を悩ませています。

昨年、「児童虐待防止法」という法律が成立しました。今までは、こんな法律はありませんでした。いうまでもなく、“児童虐待”があまりにも頻発するので、何とか防止しなければならない、ということで生まれたものです。

実は、教育家としてよく知られたペスタロッチは、胸に響く言葉を私たちに残しております。彼は「人類は、人間として最も大切なことを居間で学ぶ」といっています。

子どもたちは、いま、人間として最も大切なことを学ぶ温かい“居間”を持っているかどうか。子どもたちのために人間として最も大切なことを学ぶ場が家庭のなかに確保されているかどうか。親の教育責任を重視された牧口先生は、まず、こうしたことを問われると思います。

宇宙的視野に立つ共生の精神

二番目に申し上げたいことは、子どもたちは今、価値創造の力をしっかり身につけているのか、どうかということです。

われわれが解決していかなければならない社会に共通の問題は、実は、牧口先生の時代よりも、もっともっと深刻で難しさを増していると思います。例えば、少子・高齢化問題、

環境問題などです。牧口先生の時代にはこうした問題が人々を悩ませることはありませんでした。

未来に生きる世代は、こういう難しい問題を解決しなければならないわけですが、そのために大切なのは、何よりも価値創造の力です。

それでは、子どもたちは、価値を創造する力をしっかり身につけているといえるでしょうか。そこが問題です。十分につけているのなら、これは安心です。ところが、この点については、いろいろ心配なことがあります。価値創造力の基本には、学力がなくてはいけません。

ところが、最近、学力の低下が大きな社会問題になっております。

私が心配するのは、子どもの学習時間が減っている、また、学習への意欲が下がってきている、ということです。

三番目に挙げたいことは、牧口先生のいわれた、最大多数の人々の最大幸福の状態を実現していくために欠かせない共生の精神とか、宇宙的視野に立ってものごとを考える態度、そういった精神や態度を身につけるように、子どもたちは、十分な教育を受けているのだろうか、という問題です。

実態は、営利主義のメディアが流す情報の中で、子どもたちは自己本位、自己中心的な生き方を身につけてしまっているのではないか。そのことが心配になります。共生のためには自分を律することが、非常に大事なことです。

最近では、キレやすい子どもが増えているといわれています。それではたして、共生の社会はできるのか。地球的視野を宇宙的視野にまで広げ、人間の生き方を考える、そういうことのできる子どもたちが育っているのかどうか。この点で気になることがたくさんあります。

牧口先生は、この点で、現状のままではいけないと私たちに訴えかけてこられるのではないかと思います。

それから、四番目に申し上げたいことは、平和と人権を大切にする教育が、しっかり行なわれているのか、ということでもあります。平和の確立と人権の尊重は、私たちの幸福の基礎です。牧口先生は、死を以って平和と人権の大切さを訴えておられると思います。

すでに『人生地理学』を書かれた段階で、国と国との間の人道的関係、“平和”の大切さについて述べられております。そしてあの極端な国家主義の時代、軍国主義の時代に、牧口先生は、子どもの幸福という点から教育の改革を提唱されました。

創価教育のキーワードとして、平和と人権を挙げることができると思います。その平和と人権という点からみて、教育基本法見直し問題、中学校歴史教科書問題など、今日の日

本の教育には憂慮すべきことが多いように思います。

最後に申し上げたいことになりますが、今日、私たちの時代は、人間が宇宙旅行をしたり、宇宙を軍事的に利用する時代です。宇宙旅行、結構です。しかし、宇宙旅行を楽しみ、宇宙を軍事的に利用するだけに留まってしまったのでは、人類の未来は危険なものになるのではないかと思います。

私たちは、宇宙と向き合う中で、宇宙と自分との深いつながりを自覚し、宇宙のあらゆる現象を貫いている法にもとづいて生きるという世界、自分中心、人間本位の生き方を越えて宇宙の法と一つになって生きる宗教的世界つまり、牧口先生が法華経への信仰によって開かれた世界を私たちの心のなかにも確立することが環境危機の今日、強く求められているのではないのでしょうか。

牧口先生の、宇宙的広がりを持つ心と、慈悲の精神から生まれて発展した創価教育学は、価値創造をキーワードに、教育を通して世界の人すべてに平和と幸福をもたらそうとする願いに貫かれています。

教育の危機や荒廃が叫ばれる中で、この教育学に盛り込まれている智慧を学び、活かすことが、今日、大変、切実に求められていると思います。いまの教育の状況は創価教育学の精神を強く必要としています。

牧口先生の心を自分の心として、創価教育の精神を日々の生活の中で実践することが、子どもの幸福と未来の社会の平和のために、大切なことではないか、このことを力説いたしまして、私の拙い話を終わりとさせていただきます。

ご清聴、どうもありがとうございました。